

## 松江市立第一中学校「こころ♡ほっとタイム」の歩み（抜粋）

統括：教頭・奈良井 孝（ならい たかし）

### I 「こころ♡ほっとタイム」が私たちに生み出したもの

#### 1. 出会いと驚き

「はい、では100マス計算です。よーい、始めっ……ません！」……ええっ！  
なんでしないんだあ？？嫌だなあ、計算苦手なのになんでこんなのさせるかなあと思って、  
ドキドキしてたのに。でも、あーよかった、やらなくて……そんな感情の動きを体  
験した。教職に就いて初めての体験だった。7年前、松原第七中学校へ「不登校支援」の  
先進校視察で出向いたときの研修の一コマである。これが深美先生との、「人間関係プロ  
グラム」との、初めての出会いだった。

「人間関係プログラム」の研修は、いわゆる従来の「研修」ではなくて「模擬授業」  
を経験する。深美先生が進める「授業」を、私たち自身が「生徒」となって受け、そこで  
生まれる様々な感情や感覚を生で体験することを通して「人間関係プログラム」を学ぶ。  
そして実際に自分たちが授業をやってみながらその奥深さに触れ、楽しさを知る。驚きだ  
った。「こんな授業があるのか！」

#### 2. ジャガイモと感動

取組を本格的にスタートさせた平成25年度。「こころ♡ほっとタイム」と名付けた松  
江一中の「人間関係プログラム」が産声をあげた。前年度後半から大小何回かの深美先生  
の研修を受け、プロジェクトチームを組織し、校内の体制を整えて4月の最初の授業に臨  
んだ。公開授業「わたしのジャガイモ」である。市内他校からも参観者がある中、2クラ  
スがそれぞれの担任のカラーを打ち出し、新鮮な思いで授業を披露した。「年間8時間×  
3年間＝24時間（24プログラム）」の第1プログラムである。

自分が選んだジャガイモをよく観察し、そのジャガイモになったつもりでジャガイモの  
自己紹介を展開するという活動である。教師のモデリングを見た後、小グループで「自己  
紹介」を交流し合い、気づきや感想をシェアする。その後、グループから代表が一人、ク  
ラス全体に「自己紹介」を発表するという場面でそれは起こった。教室にいる誰もが、つ  
まりクラスの生徒も授業者の教師も、他校や市教委等のたくさんの参観者も皆が、次第に  
静まり言葉をなくし、その生徒の発表に聞き入るといった瞬間が生まれたのである。

彼はジャガイモを見つめ、語るうちに「今まで誰にも話したことがないことを話しま  
す。」と言って、自分の実際の弟について語り始めた。重い障がいがあり、幼い頃から話  
すことや歩くことができない。そんな弟を自分が支え母の力になっていかねばならないと  
いった思いを語った。返す言葉に逡巡した。心地よい重さをもった目に見えない固まりが、  
それぞれの心の中にそっと置かれたような一瞬であった。後で授業者である担任が彼にそ  
の時の気持ちを聞くと、「ジャガイモを見ているうちに、なぜか話したくなって。」と教  
えてくれた。なんという力だろう！こうした「自己開示」を引き出してしまうこの授業の  
力はすごい！このときの感動が、松江一中「こころ♡ほっとタイム」のスタートであり、  
私たちの取組の原点となった。

### 3. 希望のツール

いじめ・不登校の未然防止とその支援の具体的な取組として、先進校（大阪府松原市立松原第七中学校）で取り組まれている「人間関係プログラム」。研修を重ね、大阪への視察を経る中で、本校の生徒指導上の課題の改善にこの授業は大きな可能性をもっていると実感した。校内体制を整えて全校で取り組んでみよう。まずはやってみよう。そんな思いを少しずつ広げながら、平成25年度は取組が加速度的に進んでいった。子どもたちの笑顔と「次の『ころ♡ほっとタイム』はいつですか？」と言う声に後押しされ、初めて取り組む授業準備や教具づくりにも楽しく、熱をもって向かうことができた。前年度までの、生徒の問題行動等の課題に時間とエネルギーを費やし、心をすり減らしていた私たち教職員集団のなかに、新たな風が吹き始めるのを感じた。

いじめや不登校、問題行動等の学校の課題に、私たちはこれまでも様々な知恵や手法で向き合ってきた。それはどこの学校でも同じである。しかし、「人間関係プログラム」には子どもたちの「成長」だけでなく、取り組む私たち自身の「成長」をもたらしてくれる力がある。学校を変える大きな力をもった「希望のツール」なのである。

## II 「強い個の育成」と「同僚性の深まり」

### 1. 「強い個の育成」を目指して

毎年県内一の生徒数となる本校（平成27年度937人）は平成23年度、三年生男子を中心に生徒指導に追われる状況になった。男子十数名が授業に入らず、校舎内を徘徊するようになった。そして学校内外でいろいろな問題行動が起き、我々教員はその対応に追われ続ける毎日だった。「このままではいけない。いいわけがない！」・・・生徒の状況の改善と学校の正常化を目指し、荒れる生徒たちと向き合う日々が続いた。その時の検証と反省から、次のような問題点が浮かび上がった。

その一つは「所属感」の問題である。彼らが教室に入れないうまま、自暴自棄な行動を繰り返す一方でほとんどの教室では、きちんと授業が進められていた。教室にいる大多数の生徒と教室に入れないう彼らの間には、3年間の間に、徐々に深い溝が生まれてきていたのだ。その中で、彼らは自分たちだけで固まり、ますます所属感をなくしていった。そしてもう一つは「学力」の問題である。荒れる彼らの中には、九九が満足に言えない生徒もあり、中学三年生の授業についていくのは困難だった。学習に対する苦手意識を克服できずに劣等感を大きくする生徒も少なくなかった。この荒れの波は平成24年度にも残った。

この時のあり様から、本校の恒常的な課題である「適切な人間関係がつかれず、友人とのトラブルに悩み、不登校や不登校傾向を示したり、学級に入りにくくなったりする生徒が二年生時に増加する傾向にある。」こと、「成績や進学に対する関心は高い校区であるが、学習に対する苦手意識から、自尊感情がもてない生徒も少なくない。」ことに対して積極的で、効果的な、新たな支援の手立てを入れていくことの必要性を誰もが強く感じたのである。自分を大切にし、相手のことも大切にできる、主体的な「強い個」を育てることの必要性である。

## 2、「同僚性」の構築と「相乗効果」

驚きや感動をもってプログラムと出会い、平成25年度に熱をもって取組をスタートさせた私たちだが、1年目の取組は、子どもたちのプラスの反応と共に私たち自身の関係性にもプラスの変化をもたらしてくれたことが大きな成果となった。

荒れた状況の中では、個々の教員が自分の授業や学級を崩さないよう必死になるが、不安な思いを抱え込んで周囲に相談したり、早いうちに支援を求めたりすることができにくくなる。また、周囲の教員も気になることがあっても「自分のことで精一杯」といった意識で、困っている教員に声をかけにくくなっていく。生徒は荒れ、教員は孤立し、孤独になっていくという悪循環に陥りがちである。

しかし、「こころのほっとタイム」を始めると、次のような教員の感想が聞かれるようになってきた。「忙しい中だが学年部と一緒に教具を作成し準備するのがいい。また、授業の流し方や指示について先行した担任から感想が聞けたり、話し合ったりできるのが、学年単位で取り組む良さを実感している。」とか、「他教科の先生と教科授業について話し合うことは少なかったが、『こころのほっとタイム』のことはたくさん話すことができる。難しさやおもしろさを伝え合えるので、一緒に取り組んでいける。」また、「副担の先生がとても早く生徒のふりかえりを整理し、掲示物を作成してくださる。生徒たちも楽しみにしている。とても感謝している。」などである。こうした声が、各学年部の教員から聞かれた。「こころのほっとタイム」を心待ちにしている生徒の声と笑顔に後押しされて、教科を越えた教員同士の関わり合いが促進され、学校として新たな取組を進めているという勢いと相まって、弱りかけていた私たちの「同僚性」が加速度的に育まれていった。「好循環＝相乗効果」が動き始めたのである。

子どもたちの笑顔も更に増え、私たち一人一人の意欲も「こころのほっとタイム」にとどまらずどんどん広がっていく。「同僚性」に支えられた教職員集団としての力が「相乗効果」を生んで、生徒指導上の課題にも前向きに関わられたり、生徒との関わりにもゆとりをもって臨めたりするようになった。担任の学級経営や、教科授業での生徒の発言の受け止め方にもそれを感じられるようになった。

こうしたときには学校で行う様々な取組がとても生き生きとして進んでいく。最後に、それを象徴するエピソードをひとつ紹介したい。平成25年度の三年生を送る会での「恋するフォーチュン・クッキー 一中Ver.」の上映である。

30代の若手男性教員の企画会・職員会での提案に誰一人反対するものはなかった。三年生はもちろん、生徒たちを楽しませたい、そして何より自分たちが、今の教職員のメンバーで楽しんでやってみたいと思ったのである。60名を超える教職員が全員参加し撮影したDVDが当日上映されると、体育館は大歓声に包まれた。そして、三年生の女子の中には「最高！ありがとう！」と涙しながら退場する生徒たちの姿もあった。

～後略～